
天使の妃

観月 あき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使の妃

【Nコード】

N6035W

【作者名】

観月 あき

【あらすじ】

地方の小城主の娘マリABELは、遊びに行った幼なじみの家で突然、まるで天使のように美しい青年に、初対面でありながら求婚される。

プロローグ

さほど大きくもないリールの城下町が、この日、祭り騒ぎに沸いていた。

この国の第二王子の婚約が発表されたのだ。

そのため、広間では酒や祝いの菓子が配られ、この日から三日間はすべての人間は仕事を休むことが許された。

さらに、この月の税は、何に掛けられるものだろうとすべて免除される。

国王に王子が誕生したときでも、これほど盛大な騒ぎにはならなかっただろう。

王都では祝われることがあっても、けして豊かではない地方では、そのような祝い事もできない。

けれどこれには、理由がある。このリールも含めたウェーン地方は、アルフォード公爵家の治める土地だ。

第二王子と婚約したのは、そのアルフォード公爵家の姫君なのだ。だから、その領地であるリールでは、これほどの大規模な騒ぎになる。

リール城主の娘マリアベルも、祝い事だからと新しいドレスを一着つくってもらった。

だがそれよりも嬉しかったのは、この慶事を祝うために、隣国へ留学していた兄アスターが戻ってきたことだ。

三年ぶりに会った兄は、何も変わっていないかった。

空白だった時を取り戻すかのように、マリアベルはアスターとさま

ざまなことを話した。

彼は、そう長くは城にいらなかった。三日でまた隣国へ戻ってしまふ。

そのため、最終日には城下町だけでなく、城のなかでも盛大な宴が開かれた。

その夜。

宴の熱気がまださめていないのか、マリアベルはなかなか寝つけなかった。

彼女は自分の部屋を抜け出し、中庭に出た。そこには予想しなかった先客がいた。

「マリアベル。眠れないのか」

アスターはそう言って、マリアベルを手招きした。

ふたりは露で濡れた草の上にそのまま腰をおろした。マリアベルが空を見ると、銀色の月がふわふわと浮いて、同じ色の光をやわらかく振り撒いていた。

「兄さま、アルフォードの領主様は、王族なのよね」

「ああ。公爵家だからな」

「王族は、銀色の髪をしているって本当？」

「本当だよ。それに、蒼い目をしている」

兄は何でも知っている。マリアベルの知らない世界を、その眼で直接見てきたのだ。

「なんだか、信じられない。銀の髪も蒼の目も、見たことはないものの」

「それはそうだ、王族だから。どこにでもいるものじゃない」

「兄さま。王族の方々は、神さまの子孫だって、本物？」

マリアベルがたずねると、アスターは苦笑した。この国の王族は、神の血を引くのだという。

そのことは誰もが知っていた。幼い頃から聞かされて育ったのだ。

「本当だよ。王族っていうのは、みんな、信じられないくらいに綺麗な顔をしている」

「どうして？」

「神さまの末裔だから。王さまのご先祖さまは、銀の髪と蒼の瞳をした神さまだったんだ」

マリアベルはまばたきをした。

「だから、王族の方々は、銀の髪と蒼い目をしているの？」

「ああ。銀髪蒼眼は王族の特徴で、神さまの血を引くことの証なんだ」

「兄さまは、なんでも知っているのね」

「お前も大きくなれば、いろんなことを知るんだ、マリアベル」

そう言つて、兄はマリアベルの頭を撫でた。

優しい兄だった。

翌日、朝のまだ早い時刻、アスター＝リールは城を出て隣国ヴェリアリユートを目指した。

それが、マリアベルの見た最後の兄の姿になった。

第1話

マリアベルの実家は、ウェーン地方の北部にある。

リール家はいちおう地方城主だが、貴族といってもほとんど名ばかりのものだ。

その居城である古びた小さな城は、城主一族の姓をとってリール城と呼ばれていた。

とはいえ、城と言っても小さくあちこち壊れはじめていて、片端から修理をしても追いつかないような城だ。

季節によつては雨漏りすらしたが、それでも、マリアベルの愛する“家”であることには代わりなかった。

マリアベル・リール、今年で十六歳。十六といえば、この地方ではすでに結婚していてもおかしくない年頃だ。が、マリアベルはまだ婚約もしていなかった。

とはいえ、自分と親しい少女たちが次第に縁談を整え嫁いでゆくのを見ていると、そろそろ焦ってくる時期である。

「わたし、結婚が決まったの」

幼なじみのミーナがそう告げたのは、マリアベルと同じく幼なじみのリリエラと、三人で開いたちょっとした茶会の最中だった。

「ええっ」

「やだ、本当!？」

「うん」

急な知らせに驚いたマリアベルだが、すぐに、この年頃の少女らしい好奇心がわき起こった。

「相手はどんなひと？」

興味津々にたずねたマリアベル。するとミーナはわずかに頬を染めて、答えた。

「フレッドよ。いとこの」

「フレッド！ ああ、ちょっとかつこいい人でしょう？」

マリアベルも、そのフレッドには会ったことがあった。背が高く、精悍な顔立ちの青年だ。

「すごいじゃないミーナ、おめでとう！」

マリアベルが言うと、リリエラもうなずいた。こちらもマリアベルに劣らず、きらきらと目を輝かせている。

「そうよ、おめでとうミーナ。結婚式には呼んでね、かならず行くから」

「もちろん！ 絶対に呼ぶから」

それからマリアベルとリリエラは、フレッドのことについてミーナに怒濤のように質問をした。

まだ婚約していないふたりは好奇心と祝福の気持ちに溢れていたし、ミーナも嬉しそうにそれに答えた。

なかなかマリアベルが戻らないことに心配した両親が使いを出すま

で、三人の会話は続いたのだった。

第2話

ミーナがフレッドの実家に挨拶に行っている間、マリアベルはリエラの実家であるアイリス城を訪れていた。

リエラの家は、マリアベルの家よりも身分・格式では上だ。そのため、その居城も、リールのそれより大きい。

三日だけとはいえ、泊まりである。ちょっとした旅行のようなものだった。

普段はリール城の近くの屋敷で生活しているリエラだが、その実家は、リールから山をひとつ越えたところにある。機会がなければな、なかなか帰ることができないのだ。

「ねえリエラ、ミーナ、とても幸せそうだったね」

アイリス城の中庭を歩きながら、マリアベルは言った。

ここにはリエラの母、アイリス夫人が丹精を込めて育てた見事な薔薇が咲き乱れている。

「ええ。うらやましいわ。幼なじみの、それもあんなに素敵な人のお嫁さんになれるなんて」

リエラはしみじみとつぶやいた。

端くれとはいえ、そこは貴族の婚姻だ。そのほとんどが政略なのは当然である。

親子ほども歳の違う相手と結婚する、式の当日に相手の顔を知ったということも珍しくない。

ミーナの場合は、とても珍しく、運のよいケースと言えた。

こんな幸運、滅多にあることではない。

「ね、マリアベルは結婚しないの？」

「え。な、なんで？」

「なんでって、マリアベルも来年で十七歳でしょう。そろそろいい時期だわ」

聞いたところによると、自身もそのうち縁談が整いそうだというリリエラは、そう言った。

マリアベルはちょっと顔を赤らめた。

「あ……相手がいないから」

「でも、縁談話はちらほら入ってきてるでしょう？」

「わからないわ。お父さまは、そういう話はしてくださらないから」

結婚相手を決めるのは親であって、マリアベルではない。それほどこでも事情は同じ。

「じゃあ、いいことを思い付いたわ。マリアベル、リチャードと結婚しない？」

「えっ」

リチャードというのは、リリエラの弟だ。会ったことはないが、話は何度か聞いたことがある。

「歳はマリアベルより下だけど、お似合いだと思うの」

リリエラは、なかなか本気で言っているようだ。マリアベルは苦笑した。が、考えてみると、それもいいかもしれない。

「そうしたら、わたし、このお城で暮らすことになるのね」

「でも、それだとマリアベルが、わたしの義妹になっちゃう」

ふたりは顔を見合わせて、くすくす笑った。

「だったら、リリエラお義姉さまって呼んであげる」

「いいわね、それ」

「同い年なのにお義姉さんなんて、すこし変な感じ」

言って、マリアベルはその場でくるりと一回転した。
と、足を止める。

「マリアベル？」

「リリエラ。あれは、もしかしてリチャード？」

振り返ったところに、人が立っていた。

遠くて顔まではわからないが、ドレスを着ていないから男性だ。
しかしマリアベルの予想に反し、リリエラは言った。

「ううん、そんなことないわ。リチャードは今、この城にいないのよ」

「じゃあ、誰かしら」

「わからないわ。お父さまじゃないけど、うちの使用人でもないし……」

ふたりが話していると、ふいに人影は、こちらに気付いた。
歩いてくる。

「わ、こっちに来る」

「どうしようリリエラ」

「どうしようって、わからないわ」

困ったように辺りを見渡したりリエラは、表情を変えた。

「お客様だわ！」

第3話

その人物は、いかにも身分の高そうながわかる衣服を着ていた。青のチュニツクに白の脚衣、膝上まであるブーツ。何と言うか、物語に出てくる吟遊詩人のような服装だ。その上、西国風のつばの大きな帽子をかぶっている。

ふたりは、いまさどこかへ逃げることもできず、立ち尽くしていた。客人はふたりの前で立ち止まると、帽子のふちを持ち上げた。顔があらわになる。その瞬間、リリエラが悲鳴をあげた。

マリアベルは硬直した。言葉が出なかった。

フィエルマ
天使。

その言葉が、頭に浮かぶ。

客人は、嘘みたいに整った——綺麗すぎる容貌の持ち主だった。男の人に使うのも間違っているかもしれないが、まさに美しいという言葉がぴったりだ。

こんな人が、いるんだ。マリアベルは思った。まるで天使だ。フィエルマそれとも、物語に出てくる王子さまみたい。

「——君は？」

前触れもなく、彼はしゃべった。男性にしては高いが、澄んでよく通る声だった。

「わっ……」

話しかけられた。
わたしが？

マリABELは、どうしていいかわからなくなった。客人が話しかけてきたのは自分なのだ。
もしかしたら、これは夢なのではないか、そんなことさえ思った。
だって、そうでなければあり得ない。

「わ、わたし、は、マリABEL……マリABEL＝リールです」
「マリABEL？」

たずねられ、慌ててうなづく。

「そうです」
「僕は、シオンだよ」

そう、名乗って。
客人、シオンはマリABELの手を握った。
あやうく悲鳴をあげそうになった。
未婚の女性に触れていい男性は、身内だけと決まっているのに。

「マリABEL」

その名を呼んで、シオンはにっこり笑った。

純粋な、天真爛漫とさえ言える、笑み。
天使のようだ。いや、本物の天使だって、彼ほど完璧な美しさは持っていないだろう。
しかし、その天使は、次の瞬間誰も想像だにしなかった言葉を口に
した。

「僕と結婚してください」と。

「……………」

声にならない悲鳴が聞こえた。

マリアベルは、それが自分の声だと思った。だが、違った。それはリリエラの声だった。

「マリアベルッ、その人!!」

「え？」

シオンと名乗った彼を見る。

彼は驚いたように眼をまるくして、リリエラの方を見ていた。

「……………あ」

マリアベルは、気付いた。

彼。シオンの髪の色。

それは、まるで月明かりのように繊細な、銀。

慌てて彼の瞳を見た。その澄んだ双眸は、どんな言葉を使っても言い表せない、儚いような蒼色。

「まさか」

王族、と。

そんなはずがないと思った。

本当にやっぱり、これは夢のなかだったのか。

しかし残念なことに、これは現実のできごとだった。

銀髪蒼眼は、王家に連なる者の証。

それが、マリアベルの目の前にいる。

相変わらず、彼女の手を握ったままで。

第4話

……どうしてこんなことになったのだろう。マリABELは思った。誰か、これは実は夢だったのだと、言ってくれないだろうか。あの日から、そんなことをもう何百回考えたのか、わからない。

何の取り柄もない女の子が、ある日とつぜん、王子さまから求婚される？

そんな小説みたいなのが、起こるなんて。

物語のなかなら”有り”で済むだろうが、これは現実世界のできごとだ。それに。

マリABELは鏡を見た。うつっているのは、鳶色の髪と灰色の瞳の少女。

容姿はいたって普通だ。ひとによっては可愛らしいと言ってくれたりもするが、美人と言われたことは、ない。

とてもではないが、シオンと名乗った彼に釣り合うような美貌ではない。そもそも、彼に釣り合うような美貌の持ち主が存在するとも思えないが。

——ともかく。

彼に求婚されるような理由を、マリABELに持っていない。目立つ美人ではないし、実家が裕福というわけでもない。

だったら、なぜ、シオンはマリABELに求婚した？

まさか自分に一目惚れをした、なんてばかなこと、マリABELは思っていない。

考えもしないだろう。誰だろうとあの天使に会ったら、そんな自惚

れなどできなくなる。
ともかく。

いまのマリアベルには、シオンの考えがまったく、わからないのだ。

リリエラの家族、アイリス家は、シオンの扱いに困っていた。

彼がシオンという名前であること以外に、何も知らない。調べたところ、アイリス家の招いた客人でもないらしい。それに、シオンは姓を名乗らないから、どこの家の人間かわからない。

けれど、彼が王族であることは疑い無い。銀髪蒼眼は、アスターも言っていたように、この国の王族の特徴だ。

王族に向かつて、姓を名乗ってくれとも言えない。それはとても失礼なことだ。普通、身分の高い者は自分から名乗らないものだから、それに。

より深刻な問題があった。

三日しかなかったマリアベルの滞在期間が、もう終わってしまうのだ。

第5話

彼の部屋を訪れるのに、マリABELはかなり緊張していた。それをなんとか押し隠して、扉をノックする。

「シオンさま、よろしいでしょうか」

「——マリABEL！」

シオンは自ら扉を開け、マリABELを出迎えた。それから彼女の側にいる友人にも目を留め、言う。

「リリエラ、きみも。いらっしやい」

くったくのない笑みに、リリエラが頬を赤く染めた。天使のような笑みとはよく言ったものだ。まるで天使そのものだと、彼を見るたびマリABELは思う。

何回も見た表情なのに、まったく慣れない。あきれるほど美しい存在だ。彼が神の末裔だというのも、信じられるくらいに。

「あの、シオンさま」

ためらいながら、マリABELは呼びかける。

どのような反応が返ってくるかわからないのは承知のうえだ。けれど、いつかは言わなければならないことだった。

「実は、わたしは、城に戻らないといけないのです」
「え？」

まばたきをするシオンの表情はあどけない。
だからこそ、彼が何を考えているのかもわからない。

「この城は明日の朝に出発します。話すのが遅くて、申し訳ありません」

「じゃあ、マリアベルは自分の屋敷に戻るの？」

「はい」

すると。

シオンはほとんど迷う間もなく、言った。

「僕も行く」

「え」

「僕も、マリアベルと一緒にいきたい」

そんなことを言われる可能性を、マリアベルはまったく考えていなかった。

てつきり、これでどうにかなると思っていた。だから、こうなることは、想定外だ。

シオンをリール城に連れていけるはずがない。彼に求婚された、なんて、話せない。

そんなことを伝えたら、騒ぎになるのは目に見えている。

どうすればいいだろう。

第6話

マリABELがほとんど硬直して立ち尽くし、どれくらいの時間が経ったのだろう。

唐突に、部屋の扉が叩かれた。

びくっとして、マリABELは扉を振り返った。シオンはゆっくりと顔を上げる。

どうぞ、とシオンが言った。入ってきたのは、アイリス城の召し使いだっただ。

「リリエラお嬢様。いま、使いが参りました」
「使い？」

リリエラが聞き返す。召し使いは答えた。

「はい。リチャード様が、戻られるそうです」

言われたことを、リリエラはすぐには理解できないようだったが、みるみるとその目が輝き出す。

「リチャードが！？　じゃあ、間に合ったのね！」
「……リリエラ？」

まったく話が見えない。マリABELはシオンに視線を向けたが、彼も頭をかしげていた。

リリエラはマリABELを見る。

マリABELを振り返る彼女は、興奮しているのか頬に血がのぼって、なんだか顔色がよかった。

「マリアベル、一度広間へ戻りましょう。リチャードに紹介したいわ」

「でも…」

シオンのことは。

そう言いかけたマリアベルに「大丈夫だから」と言って、リリエラはその手を引っぱった。

それからシオンに急いで退室の言葉を述べると、まるで逃げ出すような勢いで、その部屋を飛び出した。

第7話

リチャードはリリエラの二歳下の弟ということだが、背丈は姉をすでに追い抜いている。マリアベルが目の前に立つと、彼を見上げるかたちになった。

日に焼けて毛先の色が抜けた、茶色の髪。人に好かれそうな顔立ちをしている。榛色の瞳が、彼がリリエラの弟だということを思い出させた。

と、彼はマリアベルを見て、にっこりと笑った。

「こんにちは。俺はリチャード＝アイリス。姉が、いつもお世話になってます」

礼儀正しくリチャードは言った。その様子に、マリアベルは好感を抱いた。

「はじめまして。わたしは、マリアベル＝リール」

名乗ると、リチャードはしばらくマリアベルを見つめた。が、頭を振って、真摯な表情になる。

「マリアベル姫。姉から文を受け取ったので、だいたいのことは知りました」

「え」

彼も事情を知っているのだろうか。

リリエラの方を見ると、彼女はうなずいた。

「黙って教えて、ごめんね、マリアベル」

「いいえ」

ということとは。

他家に仕えているというリチャードがアイリス城に帰ってきたのは、
そのためなのだろうか。

——わざわざ？

マリアベルが彼に視線を戻すと、榛色の瞳がまっすぐマリアベルを
見つめた。リチャードは言った。

「実は、マリアベル姫にお願いがあるんです」

「お願い？」

「会ってほしい人がいるんです。俺の主筋で、宮廷にも出仕されて
いる方だから、そのシオンとか言う人のことも知らないかと思って」

驚いて、マリアベルはすこしの間、黙り込んだ。

なるほど、リチャードの主筋ということは、当然、身分の高い人な
のだろう。王族のシオンと面識がある可能性もある。

「その、勝手に決めてすいません」

その沈黙を誤解したのか、慌てたようにリチャードは付け足した。
いいえ、とつぶやいて、マリアベルは言う。

「ありがとうございます。会わせていただきます」

「よかった。——それと、姫にもうひとつ」

「はい」

「その……」

言いよどむ彼の、なんとも形容しがたい表情。
非常に言いにくそうに、リチャードは告げる。

「あまり驚かないでほしいんです。その、俺の主筋の方も、王族なんです」

「――」

すこし経って、その言葉の意味を理解する。

王族。ということは、やはり、シオンのように美しいのだろう。わざわざリチャードが念を押すくらいに。

ようは、王族の人間の前でぽかんと見とれ立ち尽くすな、ということだ。それは相手に対し、たいへんな非礼となる。

だが、マリABELはシオンという存在を知っている。だから、多少は耐性ができているかもしれない。

それに、彼以上に美しい存在がそうそうあるとは思えない。

マリABELは言った。

「努力して、みます」

それに対し。

一拍おいて、リチャードは吹き出した。

「おもしろい方だ。――それじゃあ、呼んできます。ここで待っていてください」

第8話

結論だけ先に言うと、リチャードの主筋だという人は、十分に美しくかった。どうやら、シオンはまったくの突然変異イレギュラーというわけでもないらしい。

それはふたりの青年だった。リチャードの話では主筋のひとつとその友人だということだが、どちらも、シオンと同じく銀の髪に蒼の瞳の持ち主である。

彼らは、マリアベルに順に挨拶をした。アルディーンと名乗った青年は、甘く整った美貌と優しい声の持ち主で、彼がリチャードの主筋の人だという。立ち姿や動作のいちいちが優雅で、それこそまるで物語に出てくる王子様みたいだった。

もうひとりの青年はレイトアルシュと名乗り、こちらはどこか冷たい印象のある、無駄のない美貌のひとつだ。彼が、アルディーン青年の友人なのだという。

はじめマリアベルは、このふたりの美しさに驚いたものの、呆然となるような失態はおかさなかった。

彼らはたしかに美しい。だが、どうやらマリアベルには、シオンで耐性ができたらしい。

「おはつにお目にかかります。マリアベル＝リールと申します」

ふたりの青年は、興味深そうな瞳をして、名乗ったマリアベルをしばらく観察していた。

それをまっすぐ見つめ返すと、彼らのその美貌をまともに見ることになるので、マリアベルはさりげなく視線を下に向けた。気恥ずかしさも手伝ってのことである。

「さて、姫君」

そう口火を切ったのは、アルディーンだった。

「だいたいの話はリチャードから聞いた。が、念のためにもう一度、姫君から正確なところをうかがいたい」

マリアベルは、なんともきまりが悪い思いをした。

王族の、しかもこれほど美しい青年から丁重な言葉で話しかけられるなど、どんな反応をすればいいのかわからない。

彼らは宮廷の人間らしく、優雅な物腰で上品な話し方をする。地方城主の娘であるマリアベルとは、何もかもが違う。

自分を不愉快に思われなければいいが、と心配になった。自分は宮廷の流儀など何も分らない田舎者だ。

「姫君？」

「は、はい」

声をかけられハツとした。どうやら考え事に没頭していたらしい。

短く謝って、それからマリアベルは、自分の覚えている限り正確に、一連のことをふたりに説明した。

自分はこの城に遊びに来ていたこと。

そこでシオンに求婚されたが、彼とは初対面で、求婚理由に心当たりはないこと。

他にもいろいろ、思い付く限りのことを、話した。時折アルディーンは質問を挟んだ。マリアベルはその全部に答えた。

すべて聴き終えたアルディーンは、自身の友、レイトアルシュにたずねた。

「心当たりはあるか？」

レイトアルシュはゆっくり、うなずく。

「シオンか。珍しい名ではないからな」

「王族で、は？」

「リアルカの人間も数えるのなら、少なくとも六人はいる。もっとも、愛称も含め”シオン”と呼ばれる可能性のある者という意味だが」

レイトアルシュの言葉に、アルディーンはすこし考え込む。
それから視線をマリアベルに向け、言った。

「なるほどな。やっぱり、会った方が早いかな。——リチャード」
「はい！」

壁際にずっと静かに立っていたリチャードは、いきなり名を呼ばれ飛び跳ねた。そんな彼にアルディーンは言う。

「案内してくれ。会いに行く」

「かしこまりました」

「こいつも連れていく」

と、レイトアルシュを示す。それから、マリアベルの方からだを向けた。

「それから、姫君にご一緒願いたい。姫君、構わないか？」

「はい」

ふたりが立ち上がったので、マリアベルも慌てて席を立った。
リチャードが扉を開けて、一歩先んじ廊下に出る。

「では、案内いたします。こちらへ」

第9話

「この部屋か？」

レイトアルシュの問いに、はい、とリチャードが答える。

アルディーンが、自身の友人をちらと見た。が、何も言わない。

レイトアルシュは、その優美な外見からは想像もつかなかったが、ちよつと乱暴な動作でノックもせず扉を開けた。

うしろに控えたりチャードが目をまるくしている。けれどレイトアルシュとアルディーンは平然と部屋に入った。

その後を、慌ててマリアベルが追う。リチャードは廊下で待機するらしい。

扉の開く音に、部屋のなかで窓際に立ち外を見ていたシオンが、振り返った。

淡い蒼の双眸が、扉に向けられる。

ふたりの青年を見つけ、そしてマリアベルに気付き、その表情が、動く。

その瞬間。

この場に居合わせた三人の青年の美しい顔に、そろって驚きの表情が浮かんだ。

それぞれにその驚きの種類は違った。けれど。

「――殿下！」

思わず、といった様子で、アルディーンが声をあげた。
え、とマリアベルは彼を見た。

途端、アルディーンはしまったというように表情を固くする。だが、もう遅い。

マリアベルは確かに聞いた。彼は、殿下と言ったのだ。

「…レイのお兄さん？」

シオンは頭を傾げ、アルディーンに向かって言った。

それから、その隣のレイトアルシュとマリアベルを見る。

「マリアベル。——あれ、どうしてルーシュもいるの？」

すこし考えて、マリアベルは理解する。

ルーシュというのは、レイトアルシュのことだろう。おそらく愛称だ。

ということはこの三人、面識があるのか。

「…………誰のせいだと思っている？」

低い声で、うなるようにレイトアルシュは言った。

気のせいかな、剣呑な気配が漂っている。

「シオン。こちらの令嬢に求婚したというのは、本当か」

「マリアベルに？ うん」

はあ、とアルディーンは嘆息し、額をおさえた。

レイトアルシュはマリアベルにからだを向け、重々しい口調で言葉を紡いだ。

「…………姫君。この男の親族として、あなたに詫びたい」

事態がよく飲み込めていないマリABELは、何がなんだかわからない。

「え、っと」

「いところ——シオンが迷惑をかけた。この通りだ」

そう言つて、レイトアルシュはなんと、マリABELに頭を下げた。見ていたアルディーンが目を丸くした。だが、それ以上にマリABELが驚いた。

「レイトアルシュさま、顔をおあげください」

王族から頭を下げられるなんて、とてもではないが心臓に悪い。そうか、と言つて、レイトアルシュは顔を上げた。それからシオンの方に向き直る。

「シオン。城に戻れ」

「ルーシュ？」

「これだけ迷惑をかけておいて、戻らないつもりか？」

「——嫌だ！」

シオンの動きはすばやかだった。

マリABEL駆け寄ると、首に腕を伸ばして抱きつき、引き寄せる。

「きゃあっ！」

マリABELは驚きのあまり、声をあげた。仮にも未婚の貴族女性に、このように男性が触れていいものではない。

だがシオンは、そんなこと、気にしなかった。

マリABELに抱き付いたまま、レイトアルシュに告げる。

「僕はマリアベルと結婚する」

「まだそんなことを言うつもりか？」

もともと冷たく整った美貌の持ち主であるレイトアルシュだが、いまは恐ろしいまでに冷え冷えとした怒気を、静かに放っている。その容貌もあいまって、尋常ではない迫力だ。彼を直視せざるをえないマリアベルにとっては、非常に心臓に悪い状況である。だが、シオンは見慣れたものなのか、ひるみもしない。

「マリアベル。……僕、迷惑だった？」

そう言つて、マリアベルの顔を覗き込む。顔に近い。近すぎる。

古い色ガラスのような蒼の瞳がマリアベルを見つめる。その純粋な瞳は、マリアベルが「そんなことはない」と言うのを待っている。

「マリアベル？」

「――」

彼のせいで困ったことはないと言えば、嘘になる。

けれど、マリアベルはシオンを――この美しい天使を、自分の言葉で傷つけたくなかった。

この瞳が曇るのを、見たくない。

だから、マリアベルは口ごもったのだ。

「――わかった」

そして、マリアベルの代わりに。

そう、沈黙を破ったのは。

レイトアルシュがわずかに眉を寄せる。

「デーン」

アルデーンはゆっくりと、胸の前で腕を組んだ。

「このままじゃ、いつまで経っても話が終わらない」

それから肩をすくめて、シオンを見る。

シオンはまばたきをした。

彼に、アルデーンが言った。

「一度、王都に戻るべきだな」

「デーン、それは」

レイトアルシュが何か言いかける。

しかしマリアベルの顔を見て、やめた。

「まさか、“シオン”を力ずくで引きずって行くわけにもいかないだろう」

アルデーンはそう言って、優雅な足取りでマリアベルに歩み寄った。

「リールの令嬢。申し訳ないが、彼と……我々と一緒に、王都へ来ていただけないか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6035w/>

天使の妃

2011年12月18日17時48分発行